『三国演義』の「七実三虚」について

立間祥介

元末明初の人羅貫中の作といわれる『三国演義』が、宋・元以来民間で行われてきた「説話」（講釈）や戯曲にのっとりながら、正史の『三国志』やその他の史書によって部分的に誤りを正し、かつ大いに増補して集大成されたものであることは周知の通りである。魯迅の言を借りれば、「みな陳寿の『三国志』および裴松之の注に照応させて、時々また口語体を採用し、そして敷衍を加えて作ったものである。議論のところはかなり習鑿歯、孫盛の言葉を取り、そのうえ盛んに「史官」および「後人」の詩を引いている。しかし旧史に準拠すれば描写が困難になるし、虚構を雑えると曖昧になりがちだ、だから明の謝肇淛（『五雑俎』十五）は『太実則近腐』（あまりに史実どおりでは陳腐に近い）といっているが、清の章学誠（『丙辰雑記』）はまたその「七実三虚惑乱観者」（七分本当で三分ウソで観るものを惑乱させる）を非難したのである[1]」ということになる。しかし、謝肇淛の非難はともかく、章学誠の「七実三虚」説は、読書人の立場からする非難であって、観点を換えれば、「七分の史実」に「三分の虚構」を配して、その「虚構」をも「史実」であるかの如く見せかけ、読書人の目をも欺きおおせた作者[2]の力量を認めたものでもある。それにしても、『三国演義』（以下『演義』と略称）がこのような形で問題となり得たのは、魯迅の言にもあるように正史の『三国志』をはじめとする数々の資料がすでにあったか

らであり、これがもし『水滸』のように、「一実九虚」的作品であったら、はじめから問題にもならなかったはずである。小文では、『演義』から二三の人物を取り上げ、それぞれの人物の特定の事項についての正史（裴松之注を含む）その他の資料と元刊本『三国志平話』、『演義』における記述を摘記、比較し、それぞれの人物像の形成過程をたどってみてみようと思う。あるいは、近世中国の小説作者およびその作者の背後に控える尨大な小説読者の小説観を探る手掛りにでもなるのではないかと思うからである。[3]

一

『演義』が劉・関・張三人が義兄弟の盟約を結ぶ「桃園結義」から始まるのは『三国志平話』（以下『平話』と略称）にすでにあるところだが、三人の扱い方については大きな違いがある。まず正史の劉・関・張各伝および『平話』・『演義』のそれぞれ冒頭を引用してみる。

（傍点は筆者）

「蜀志」	『平話』	『演義』
「先主伝」 先主姓劉、諱備、字玄徳、涿郡涿県人、漢景帝子中山靖王勝之後也。〔中略〕先主少孤、与母販履織席為業。〔中略〕先主不甚楽読書、喜狗馬・音楽・美衣服。身長七尺五寸、垂手下膝、顧自見其耳。少語言、善下人、喜怒不形於色。好交結豪俠、	「桃園結義（一）」 話説一人、姓関名羽、字雲長、乃平陽蒲州解良人也。生得神眉鳳目、虬髯、面如紫玉、身長九尺二寸、喜看春秋左伝。観乱臣賊子伝、便生怒悪。因本県官員貪財好賄、酷害黎民、将県令殺了、亡命逃遁、前往涿郡。 不因趦難身漂泊、怎遇分金重義知。	「第一回」 且説張角一軍、前犯幽州界分。幽州太守劉焉、〔中略〕随即出榜招募義兵。榜文行到涿県、引出涿県中一個英雄。那人不甚好読書、性寛和、寡言語、喜怒不形於色。素有大志、専好結交天下豪傑、生得身長七尺五寸、両耳垂肩、双手過膝、目能自顧

年少争附之。中山大商張世平・蘇双等貲累千金、販馬周旋於涿郡、見而異之、乃多与之金財。先主由是得用合徒衆。

「関羽伝」

関羽、字雲長、本字長生、河東解人也。亡命奔涿郡。先主於郷里合徒衆、而羽与張飛為之禦侮。先主為平原相、以羽・飛為別部司馬、分統部曲。先主与二人寝則同牀、恩若兄弟。而稠人広坐、侍立終日、随先主周旋、不避艱難。〔中略〕初、曹公壮羽為人、而察其心神無久留之意、謂張遼曰、「卿試以情問之。」既而遼以問羽、羽歎曰、「吾極知曹公待我厚、然吾受劉将軍厚恩、誓以共死、不可背之。吾終不留、吾要当立効以報曹公乃去。」遼以羽言報曹公、曹公義之。〔注〕『傅子』曰、遼欲白太祖、恐太祖殺羽、不白、非事君之道、乃歎

却説有一人、姓張名飛、字異徳、乃燕邦涿郡范陽人也。生得豹頭環眼、燕頷虎鬚、身長九尺余、声若巨鐘。家豪大富。因在門首閑立、見関公街前過、生得状貌非俗、衣服藍縷、非是本処人。縦歩向前、見関公施礼。関公還礼。飛問曰、「君子何往。甚州人氏。」関公見飛問、観飛貌亦非凡、言曰、「念某河東解州人氏、因本県官虐民不公、吾殺之。不敢郷中住、故来此処避難。」飛見関公話畢、乃大丈夫之志。遂邀関公於酒肆中。飛叫量酒、将二百銭酒来。主人応声而至。関公見飛非草次之人、説話言談、便気和酒尽。関公欲待還盃、乃身辺無銭、有艱難之意。飛曰、「豈有此理。」再叫主人将酒来。二人把盞相勧、言語相投、有如契旧。正是、

竜虎相逢日、君臣慶会時。

説起一人、姓劉名備、字玄徳、涿

其耳、面如冠玉、脣若塗脂、中山靖王劉勝之後、漢景帝閣下玄孫、姓劉、名備、字玄徳。〔中略〕玄徳幼孤、事母至孝、家貧、販屨織蓆為業。〔中略〕当日見了榜文、慨然長嘆。随後一人厲声言曰、「大丈夫不与国家出力、何故長嘆。」玄徳回視其人、身長八尺、豹頭環眼、燕頷虎鬚、声若巨雷、勢如奔馬。玄徳見他形貌異常、問其姓名。其人曰、「某姓張、名飛、字翼徳。世居涿郡、頗有荘田、売酒屠猪、専好結天下豪傑。恰纔見公看榜而歎、故此相問。」玄徳曰、「我本漢室宗親、姓劉、名備。今聴黄巾倡乱、有志欲破賊安民、恨力不能、故長歎耳。」飛曰、「吾頗有資財、当招募郷勇、与公同挙大事、如何。」玄徳甚喜、遂与同入村店中飲酒。正飲間、見一大漢、推着一輛車子、到店門首歇了、入店坐下、便喚酒保、「快

曰、「公君父也、羽兄弟耳。」遂白之。……。

「張飛伝」

張飛、字翼徳、涿郡人也。少与関羽俱事先主。羽年長数歳、飛兄事之。

郡范陽県人氏、乃漢景帝十七代賢孫、中山靖王劉勝之後、生得竜準鳳目、禹背湯肩、身長七尺五寸、垂手過膝、語言喜怒不形於色、好結英豪、少孤、与母織席編履為生。〔中略〕徳公不甚楽読書、好犬馬、美衣服、愛音楽。当日、因販履於市、売訖、也来酒店中買酒喫。関・張二人見徳公生得状貌非俗、有千般説不尽底福気。関公遂進酒於徳公。公見二人状貌亦非凡、甚喜、也不推辞、接盞便飲。飲罷、張飛把盞、徳公又接飲罷。飛邀徳公同坐、三盃酒罷、三人同宿、昔交便気和。有張飛言曰、「此処不是咱坐処。二公不棄、就敝宅聊飲一盃。」二公見飛言、便随飛到宅中。後有一桃園、園内有一小亭。飛遂邀二公、亭上置酒、三人歓飲。飲間、三人各序年甲、徳公最長、関公為次、飛最小。以此大者為兄、小者為弟。宰白馬祭酔酒来吃、我待趕入城去投軍。」玄徳看其人、身長九尺、髯長二尺、面如重棗、脣若塗脂、丹鳳眼、臥蚕眉、相貌堂堂、威風凜凜。玄徳就邀他同坐、叩其姓名。〔中略〕玄徳遂以己志告之。雲長大喜。同到張飛荘上、共議大事。飛曰、「吾荘後有一桃園、花開正盛。明日当於園中祭告天地、我三人結為兄弟、協力同心、然後可図大事。」玄徳・雲長斉声応曰、「如此甚好。」次日、於桃園中、備下烏牛白馬祭礼等項、三人焚香再拝而説誓曰、「念劉備・関羽・張飛、雖然異姓、既結為兄弟、則同心協力、救困扶危、上報国家、下安黎庶、不求同年同月同日生、但願同年同月同日死。皇天后土、実鑒此心。背義忘恩、天人共戮。」誓畢、拝玄徳為兄、関羽次之、張飛為弟。

天、殺烏牛祭地。不求同日生、只願同日死。三人同行同坐同眠、誓為兄弟。

次に主として傍点を付した箇処について検討してみよう。

一、『平話』・『演義』では劉備・関羽・張飛は義兄弟の盟約を結ぶ――結義――が、正史によって見るかぎりその事実はない。ただし、「関羽伝」・「張飛伝」にそれに近い関係があったことは述べられている。張飛は関羽に兄事していたし、劉・関・張は情においては兄弟同然であった。かつまた、共に死ぬことを誓いあった仲でもあった。しかし、義兄弟――「異姓兄弟」――であったとは書かれていないし、[4] 張飛が関羽に「兄事」したというのも、おそらくは文字通り兄のように事えたというだけであろう。[5] さらに「魏志・劉曄伝」には「且関羽与備、義為君臣、恩猶父子」なることばがあり、劉備と関・張との信頼関係が、一般の君主と臣下の関係を越えるものであったものの、義兄弟では決してなかったことを証明している。

二、三人の肉体的特徴について、正史では劉備についていささか触れられているほか、関羽については彼が「美鬚髯」であったことが「関羽伝」に見えるだけで、張飛については全く書かれていない。彼らのそうした特徴は、説話――講釈――の普及・発展にともなって形成されたもので、晩唐にはすでに相当程度できあがっていたものと思われる。李商隠の「嬌児詩」に見える「或は張飛の胡を虐り」の一句は、張飛の鬚面が子供にまで知られていた証拠である。「三国」説話はおそらくその頃から大道芸人によって、講釈や人形芝居の形で普及され、それにともなって『平話』における劉備の「竜準鳳目、禹背湯肩」、関羽の「神眉鳳目、虬髯、面如紫玉」、張飛の「豹頭環眼、燕頷虎鬚」などという個性的容貌が形成されたものであろう。この点について『演義』がほとんど『平話』を踏襲しているのは、これがすでに民衆のあいだで定着し、動かすことができなかったことを物語っている。

三、『平話』の主人公が張飛であることはすでによく

知られているが、それはこの一節を見ただけでもわかる。中国の講釈（それから発達した通俗小説）の主要な方法の一つに、人物・風景を描く場合、客観的描写を極力避け、その場の中心人物の目を通したいわば主観的描写を行うやり方がある。[6] そこで『平話』を見ると、関羽の説明があって、次に張飛が彼を見かけて声をかけるところから話が展開する。次に張・関二人が劉備を見、張飛が劉備に同席するよう勧める。またここには引用しなかったが、結義のあと単身「燕主」（燕の長官）と対面し劉備を推挙して挙兵の手筈をととのえるのも張飛である。以下、『平話』全篇を通じて張飛一人舞台の観がある。先の李商隠の詩とも思いあわせると、初期の「三国」説話が張飛を主人公として語られていたのは確かなようである。『演義』はこれに対し、まず劉備が張飛を見て声をかける。関羽が登場すると、その容姿は劉備の目を通して語られ、劉備が彼に同席を勧める。その関羽も、『平話』と『演義』では全く違う。『平話』では尾羽打ち枯らした逃亡者という姿で登場するが、『演義』では非の打ちどころのない偉丈夫として颯爽と登場する。これは、外患の迫った北宋末に彼が朝廷によって神格化され、その後、南宋一代を通じてその神格化が一層強められたのにあわせて、民間でも彼に対する評価がとみに高まったことを反映したものである。[7] 後で触れる元曲「関大王単刀会」などもこうした流れのなかで生まれたものであろうが、この「桃園結義」の場にかぎり、張飛に馳走になって酒を奢り返そうとし、懐中に金のないのに気がついて唇をかむ義理堅い関羽の方がよく書けており、当時行われていた説話の面影をよく伝えている。

四、『平話』は上・中・下三巻、字数はあわせて約八千八百字ある。これに対して『演義』は約七十三万四千字、十倍近くに達する。『平話』は講釈師の口演台本であったから梗概であればよく、講釈師が「これを本にして引きのばして口演し、大いに波瀾を加えれば、聴者を悦ばせることができるからである。」[8]『演義』は純然たる読物であるからそうはいかない。しかも、宋・元の説話や戯曲で人物像も鮮明になってき、劉・関・張三兄弟、なかんずく劉備・関羽の美化が意識的に進められた。ここに引用した箇処だけでも、劉備の場合、『志』に「先生不甚楽読書、喜狗馬・音楽・美衣服」とあって、『平話』がそのまま残しているのに対し、『演義』は、「不甚

楽読書」だけ残して、「事母至孝」の四字をわざわざ追加している。この点は次に述べる敵役としての曹操の場合とまったく対蹠的である。関羽については先にもちょっと触れておいたが、第六十六回「関雲長単刀赴会」など『平話』の「関公単刀会」を発展させた関漢卿の戯曲「関大王単刀会」を取り入れて関羽の武者振りをいっそう強調した。もし正史によったなら、このとき毅然としていたのは呉の魯粛であり、言いこめられて一言もなかったのが関羽としなければならぬはずである。[9] 関羽は神格化されただけにとりわけこのような形での美化の度合が強い。たとえば『演義』第五回、関羽が酒の燗がさめぬうち呂布の武将華雄を斬るくだりなぞ、「関羽伝」にもなければ、『平話』[10]にも見えない。華雄を討ち取ったのは孫堅であったのを、関羽の功績とし、さらに温酒云云の話を加えた創作である。ほかにも『平話』ですでに関羽が袁紹の部将顔良・文醜を討ち取り、また曹操の部将蔡陽を斬るくだりがあらわれるが、いずれも正史とは違っている。[11] また、関羽が死後数々の霊験をあらわす話は、すべて『演義』ではじめて出るもので、『平話』ではその死が「関公在荆州東南、困於山嶺。落後数日、大雨降後、説呉・魏両国官員至荆州、言聖帰天」（関公水渰于禁）と書かれるだけ、その後関羽の名は一切見えない。

以上、主として「桃園結義」における劉・関・張三人の人物像の変遷を追ってみたが、この三人と対立する曹操の描き方について次に見てみよう。

二

魏を漢の正統の後継者とする立場で書かれた陳寿の『志』は、「魏志」のみ「帝紀」を立て、「蜀志」・「呉志」では「先主・後主伝」・「呉主伝」と列伝扱いをしている。したがって「魏志」の「武帝紀」（曹操伝）本文には曹操に対する批判的言辞はない。しかし裴注には呉の側の人が書いた『曹瞞伝』その他が収録されていて、彼の負（マイナス）の面が伝えられ、本文とあわせ読むとき、曹操の立体的人間像を思い描くことができる。一方、「三国」説話の方は、発生の当初から蜀を正統とする立場で語られていたらしい。蘇軾の『志林』巻六に見える「王彭嘗云、云々」の記事[12]はその唯一の手掛りだが、劉備が負けると泣き、曹操が負けると快哉を叫ぶという子供たちの様子、

劉備を君子、曹操を小人とする蘇軾のコメントを見ると、北宋末には当時「説三分」と呼ばれた「三国」説話で、曹操がすでに敵役として定着していたことがわかる。それから二百年余りして出た『平話』でも、むろん曹操は敵役ではあるが、上巻ではまったくその気配はなく、むしろ劉備のよき理解者として語られる。そして、中巻にはいると、まったく唐突に皇位の簒奪をたくらむ「奸雄」として描かれる。『平話』が講釈師の口演台本であったとすれば、講釈師は口演するにあたって、曹操の奸雄たる所以を縷々説明していたはずだし、『平話』以外の口演台本[13]にはそれも書かれてあったかもしれない。『平話』はとにかく一貫性に欠けているが、『演義』の作者は、狡猾・陰険・非情・極度の猜疑心など、負の属性を一身に荷った曹操像の一貫性を保たせるため、先の劉備の場合と同じ方法を用いて否定的人物像を作りあげている。「魏志・武帝紀」の冒頭と『演義』第一回、曹操紹介のくだりを比較してみよう。

「武帝紀」	『演義』
太祖武皇帝、沛国譙人也、姓曹、諱操、字孟徳、漢相国参之後。〔注〕『曹瞞伝』曰、太祖一名吉利、小字阿瞞。〔中略〕太祖少機警、有権数、而任侠放蕩、不治行業、故世人未之奇也。〔注〕『曹瞞伝』曰、太祖少好飛鷹走狗、游蕩無度、其叔父数言之於嵩。太祖患之、後逢叔父於路、乃陽敗面喎口。叔父怪而其故、太祖曰、「卒中悪風。」叔父以告嵩。嵩驚愕、呼太祖、太祖口貌如故。嵩問曰、「叔父言汝中	殺到天明、張梁・張宝引敗残軍士、奪路而走。忽見一彪軍馬、尽打紅旗、当頭来到、截住去路。為首閃出一将、身長七尺、細眼長髯、官拝騎都尉、沛国譙郡人也、姓曹、名操、字孟徳。〔中略〕曹嵩生操、小字阿瞞、一名吉利。操幼時、好游猟、喜歌舞、有権謀、多機変。操有叔父、見操游蕩無度、嘗怒之、言於曹嵩。嵩責操。操忽心生一計、見叔父来、詐倒於地、作中風状。叔父驚告嵩、嵩急視之、

風、已差乎。」太祖曰、「初不中風、但失愛於叔父、故見罔耳。」嵩乃疑焉。自後叔父有所告、嵩終不復信、太祖於是益得肆意矣。

操故無恙。嵩曰、「叔言汝中風、今已愈乎。」操曰、「児自来無此病、因失愛於叔父、故見罔耳。」嵩信其言。後叔父但言操過、嵩並不聴。因此、操得恣意放蕩。

『演義』が容貌・身長などを書き加えたほかは、正史の注をすっかり利用し、彼が若いうちからすでに親まで欺すような悪辣な男であったことを読者に印象づけようとしたことがよく分る。

このような「注」の利用法で、もっと極端な例が第四回に見える。曹操は董卓の専横を憎んで官職を棄て、故郷陳留へ逃亡するが、董卓に指名手配され、中牟県で捕えられる。幸い義侠の士である県令の陳宮に救われ、二人で逃れる途中、旧知の呂伯奢の家に立寄るというのが『演義』の設定である。この部分、『平話』にはもちろんないので、「魏志」と『演義』とを抄記してみる。なお『演義』では、この前に伯奢が酒を買いに出ることになっている。

「武帝紀」

卓表太祖為驍騎校尉、欲与計事。太祖乃変易姓名、間行東帰。〔注〕『魏書』曰、太祖以卓終必覆敗、遂不就拜、逃帰郷里。従数騎過故人成皐呂伯奢。伯奢不在、其子与賓客共劫太祖、取馬及物、太祖手刃撃殺数人。『世語』曰、太祖過伯奢。伯奢出行、五子皆在、備賓主礼。太祖自以背卓命、疑其図己、手剣夜殺八人而去。孫盛『雑記』曰、太祖聞其食器声、以為図己、遂夜殺之。既而悽愴曰、「寧我負

「演義」

操与宮坐久、忽聞荘後有磨刀之声。操曰、「呂伯奢非吾至親、此去可疑、当窃聴之。」二人潜歩入草堂後、但聞人語曰、「縛而殺之、何如。」操曰、「是矣。今若不先下手、必遭擒獲。」遂与宮抜剣直入、不問男女、皆殺之、一連殺死八口。搜至廚下、却見縛一猪欲殺。宮曰、「孟徳心多、誤殺好人矣。」急出荘上馬而行。行不到二里、只見伯奢驢鞍前鞦懸酒二瓶、手攜果菜而来、叫曰、「賢姪与使君何故便去。」

人、毋人負我。」遂行。

操曰、「被罪之人、不敢久住。」伯奢曰、「吾已分付家人宰一猪相款、賢姪・使君何憎一宿。速請転騎。」操不顧、策馬便行。行不数歩、忽抜剣復回、叫伯奢曰、「此来者何人。」伯奢回頭看時、操揮剣砍伯奢於驢下。宮大驚曰、「適纔誤耳、今何為也。」操曰、「伯奢到家、見殺死多人、安肯干休。若率衆来追、必遭其禍矣。」宮曰、「知而故殺、大不義也。」操曰、「寧教我負天下人、休教天下人負我。」陳宮黙然。

曹操と陳宮は呂伯奢の家の者が馳走の用意をしている物音を聞きとがめ、豚を「縛って殺そう」といったのを、自分たちに向けられたものと勘違いして、そこに居合せた八人を皆殺しにして立退く。そこへ酒を買って戻ってきた呂伯奢と行きあい、伯奢まで殺してしまう。陳宮の「さっきのは間違いだったから仕方ないとして、今度のは知っていてしたもの。非道ではないか」という抗議は、読者の声を代弁したものである。

この挿話が、「武帝紀」に付けられた「注」三項のうち、『世語』と『雑記』からの引用文に基づいていることはいうまでもない。これが若し『魏書』からの引用文によっていたらどうなるか。非は相手にあるのだから、曹操の武勇譚となるところである。もっともそれでは一貫性が崩れてしまうし、話としても面白くない。『演義』の作者は、彼の猜疑心の強さや非情さを強調しようとしてこの挿話を作ったのだが、それがかえって追われる者の迫切した心理をリアルに写しだすことになって、作者が預期した以上の効果を生みだすことになったのであり、曹操についてはこのような例が多い。

三

次に魯迅が「諸葛の豊富な智略を描こうとしては狡猾

にしている[14]」と評した孔明、諸葛亮の場合はどうか。孔明は『演義』の立役者の一人であり、彼が劉備の「三顧の礼」にこたえて山を下る第三十八回から百四回の死にいたる間、読者は彼がつぎつぎに繰り出す妙手奇策に目を見張るばかりということになる。しかし事実はどうだったか。「蜀志」の「諸葛亮伝」には、『演義』で語られているようなはなばなしい戦闘場面は一つもない。外交官、政治家としての業績が残されているだけであり、著者の陳寿自身わざわざ彼の政治的手腕が戦略戦術家としての手腕より勝っていたことを書き添えているほどでなのである。もっとも陳寿がこのように言ったのは、当時、彼が名将として知られ、その面で一般に高く評価されていたからであろうし、その俗説を打消し、正統な評価を与えようとしたからであろう。それは歴史家として当然の態度である。「三国」説話はそういうわけにはいかない。彼はやはり奇略縦横の大軍師であってもらわなければならない。『平話』（中巻）で、「諸葛本是一神仙、自小学業、時至中年、無書不覚、達天地之機、神鬼難度之志、呼風喚雨、撒豆成兵、揮剣成河」と、妖術使い同然の紹介が行われるのは、この間の事情を物語るものである。

しかし、孔明の場合、不世出の軍師という面での記録が正史には一切ないのだから、『平話』以前の台本作者たち、あるいは『演義』の作者も困ったに違いない。うまい手が思い浮かばない時は、他の名将の例まで借用しなければならなかった。例えば、『演義』第四十回「諸葛亮火焼新野」で、孔明は川を上流で塞きとめ、下流に曹仁の大軍を誘いこんでおいて一気に押し流してしまうが、これは韓信が濰水の合戦で楚の竜且の大軍二十万を葬った時に用いた作戦で、『史記・淮陰侯伝』に見える挿話を借用したものである。『平話』ではこの場面に詳しくは触れておらず、水攻めにしたとあるだけだが、実際の講釈ではすでに『演義』のように語られていたかもしれない。

また、孔明の奇智を遺憾なく発揮した例として有名なものに『演義』第四十六回「用奇謀孔明借箭」のくだりがある。曹操が百万の大軍をひきいて長江北岸まで攻め下り、南岸の呉・蜀の大軍と対峙した時のこと、霧に乗じて船を漕ぎ出した孔明が、曹操の陣地の目前を遊戯して挑撥し、雨あられと射かけられる矢を藁たばで囲った

船で受けとめて、またたく間に十万本の矢を調達する挿話である。『演義』ではこれは赤壁の合戦（二〇八年）の前哨戦としているが、実際に同種の事件があったのはそれから五年後、曹操が濡須に攻め下って孫権と対決した時、孫権がやったことである。「呉志」の「呉主伝第二」（孫権伝）の建安十八年の項に次のように見える。

十八年正月、曹公攻濡須、権与相拒月余。曹公望権軍、歎其斉肅、乃退。〔注〕『魏略』曰、権乗大船来観軍、公使弓弩乱発、箭著其船、船偏重将覆、権因廻船、復以一面受箭、箭均船平、乃還。

つまり孫権はもともと矢を取りに行ったものではなく、片方に矢が集中してその重さで転覆しそうになったため、向きを変えて反対側に矢を受け、転覆を免れて帰ったのであった。『平話』ではこの故事を取入れ、赤壁の前哨戦の一つとしたが、百万本の矢をせしめて、「丞相、矢をかたじけない」と呼ばわって曹操に地団駄踏ませたのは、孔明ではなくて周瑜だった。『演義』作者はこれを借りて孔明の功に帰し、孔明に百万本の矢を調達させるよう仕向ける役に周瑜を使うなどして、精彩ある物語に仕上げたのである。

孔明が五丈原で陣没するくだりも有名だが、「蜀志・諸葛亮伝」には、建安十二年（二〇七）の項に、

其年八月、亮疾病、卒于軍、時年五十四。

とあり、漢中の定軍山に埋葬すること、大袈裟な支度は不要と遺言したことが書き添えられているだけである。『平話』巻の下「秋風五丈原」の項では、ここが、

又数日、叫楊儀・姜維・趙雲衆太尉近前。軍師哭而告曰、「吾死、可将骨殖帰川」。衆人皆泣下。当夜、軍師扶着一軍、左手把印、右手提剣、披頭、点一盞燈、用水一盆、黒鶏子一個、下在盆中、圧住将星。武侯帰天。

と、やや劇的になる。さらに『演義』第百四回「隕大星漢丞相帰天」の項では、病気見舞の勅使に対し、後継者について遺言するくだりが追加される。

孔明曰、「吾已知公復来之意。」（李）福謝曰、「福奉天子命、問丞相百年後、誰可任大事者。〔中略〕」孔明曰、「吾死之後、可任大事者、蔣公琰其宜也。」福曰、「公琰之後、誰可継之。」孔明曰、「費文偉可継之。」福又問、「文偉之後、誰当継者。」孔明不答。衆将近前視之、已薨矣。

この問答は、明らかに『史記・高祖本紀』の高祖と呂后の問答を真似たものである。

孔明の盟友であり、『演義』では孔明の露払い役といった形で登場する徐庶の説話は、同じく他からの借用であるが、『平話』がまとめられる以前、「三国」説話の揺籃期ともいえる時代に、同時代に行われていた他の説話をそっくり取入れてできあがったものと思われる。

徐庶については、「諸葛亮伝」の本文と「注」にその事跡がしるされている。彼は孔明を劉備に推挙してしばらくは孔明とともに仕えたが、当陽で曹操に大敗したとき母親が捕えられたため、已むなく曹操に仕えた人物である。『平話』ではこれが去りがけに孔明を推挙するという風に変り、『演義』ではさらに彼の老母の挿話が加わって完成する。

徐庶は無勢の劉備の参謀として曹仁の大軍を撃破するが、その才能に惚れこんだ曹操は彼を味方につけるべく、彼の母親を捕えてきて呼び寄せの書面を書かせようとする。しかし気丈な母親に拒否されたので、その筆跡を真似た偽の書面をもって徐庶を呼び寄せる。そして徐庶が母親の身を按じて馳けつけると、母親は明主劉備を棄て逆賊曹操に膝を屈した彼を罵り、彼の面前で自殺するのである。

この徐庶とその母親の物語の原型は、唐代の変文「漢将王陵変」に求められる。「王陵変」は『史記・陳丞相世家』と『漢書・王陵伝』に見える漢初の功臣王陵とその母親――項羽に捕えられて自殺する――の故事を敷衍したものであるが、徐庶の説話に取込まれ、「三国」説話が流行するにしたがって忘れられていったものではなかろうか。ほかにも、『平話』に一回だけ名が出、『演義』でも同じく一回だけ名が出る関索のこと[15]、関羽に殉じて死に後に神となる仮空の人物周倉のこと[16]など、なお気になるものがあるが紙数が尽きたので、次の機会に譲ることにしたいが、この関索説話のように「三国」説話のなかには『演義』にいたる過程で淘汰され消えていった説話もあるだろうし、逆に「王陵変」説話のように主人公を変えて生き残った他系統の説話もなおいくつかあるはずだ。

宋から元・明へかけての「三国」説話の発展期は、市民社会の発展にともなう大衆芸能界の発展期とかさなる。南宋においては、「三国」・「五代史」などの歴史物につ

づき、「水滸」や「岳伝」など同時代の英雄譚がレパートリーに加わってくる。「三国」説話も当然いつまでも素朴な『平話』の段階にとどまってはいられなくなる。民衆――広義の「読者」――がそれを許しはしない。そうした「読者」の意向を汲み取りながら、動かせない資料である『三国志』の枠組のなかで、増幅に増幅を重ね、また淘汰に淘汰を重ねて形成されたのが『三国演義』の数多の人物像である上は、「七実三虚」と言われるこの「三虚」の空間こそが歴代民衆の夢を集約したところと見ることができよう。そして、後世の読者であるわれわれは、この「三虚」の空間から、逆に歴代中国民衆のなまなましい息吹きを読み取ることができるのではあるまいか。

(1) 増田渉氏訳『中国小説史・上』(昭和三十七年十二月。岩波文庫)二一五ページ。本書原題は『中国小説史略』。

(2) 『三国演義』の作者は元末明初の人羅貫中といわれているが、確証はない。ここでいう作者とは『三国志平話』の筆者である無名の口演台本作成者やその他の台本作者、講釈師を含めた作者たちのことである。

(3) 小文で用いたテキストは、中華書局版『三国志』(一九五九年十二月初版)、上海古典文学出版社版『三国志平話』(一九五五年四月初版)、作家出版社版『三国演義』(一九五五年九月初版)である。この『三国演義』は流布本のいわゆる毛宗崗本である。

(4) 義兄弟の約束をしている場合には、例えば「蜀志・馬超伝」の〔注〕に「典略に曰く」として「(馬騰)会三輔乱、不復来東、而与鎮西将軍韓遂結為異性兄弟、……」と見えるように書かれるはずである。

(5) 「蜀志・先主伝」に「(公孫)瓚深与先主相友。瓚年長、先主以兄事之」とあり、これも義兄弟を意味するものではない。

(6) 趙樹理「『三里湾』写作前後」(「文芸報」一九五五年第十九号)に、講釈など中国伝統芸能の手法についての詳しい説明がある。

(7) 黄華節『関公的人格与神格』(台湾商務印書館。一九六七年一月)によれば、関羽の神格化は、北宋・哲宗の紹聖三年(一〇九六)、荊州玉泉山の関羽の祠が勅命によって「顕烈廟」と命名されたことからはじまるとされる。(一三二ページ)

(8) 魯迅、前掲書二一三ページ。

(9) 「呉志・魯粛伝」本文および「注」。

(10) 「呉志・孫破虜伝」に、「(孫)堅復相収兵、合戦於陽人、大破卓軍、梟其都督華雄等」とある。

(11) 「蜀志・関羽伝」に、建安五年(二〇〇)、関羽は曹操

の先鋒として白馬に出陣し、袁紹側の大将顔良の首を取ったとあるが、文醜を殺したことは出ていない。文醜のことは「魏志・武帝紀」建安五年二月の項に見え、曹操が自ら指揮した騎兵隊に斬られたとある。

（12）『志林』巻六。「王澎嘗云、『塗巷中小児薄劣、其家所厭苦、輒与錢、令聚坐聴説古話、至説三国事、聞劉玄徳敗、頻蹙眉、有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快。』以是知君子小人之沢、百世不斬。」（孔另境『中国小説史料』より引用）この文章は、北宋末の説話――講釈――の様子を伝えるものとしても第一級の資料である。

（13）元刊本『三国志平話』は、見返しに、「建安虞氏新刊」・「至治新刊」と「新刊」であることが強調されている。ここから鄭振鐸は、「新刊」という限りその底本となったものがあるに違いないと推察している。（「三国志演義的演化」・『中国文学論集』所収。一九三四年）建安は福建省の地名であり、同地は通俗図書出版の盛んなところであったから、他の書肆からも他の『三国平話』が出ていた可能性は十分にある。

（14）魯迅、前掲書二一五ページ。

（15）関索が関羽の遺児として顔を出すのは、影印本『平話』下巻第十六葉（上海古典文学出版社活字本では一二九ページ）であるが、その前後に、同じく関羽の遺児である関平の名が出ているところを見ると、おそらく同一人物ではないかと思われ、関索というのは、あるいは板下書きの書き間違えではないかという気がする。『演義』では第八十七回、話の筋からいえば『平話』と同じ場所に出る。そこでは関羽の第三子で、荊州失陥の際負傷し、治療していたという触れこみで現われるわけだが、孔明が先鋒の一員に加えたとあるだけで、以下、名が出ることはない。そうしてみると、先の『平話』が仮りに関平の間違いとしても、間違いがそのまま踏襲され、処置に困った『演義』作者が、これまで顔を出せなかった事情をこしらえたと推測できないこともない。この関索は『志』には一切見えず、「蜀志・関羽伝」で関羽の子とされているのは、関興・関平の二人だけである。しかし、関索という名は、南宋の時から知られていた。例えば、『水滸』の原型である元刊本『大宋宣和遺事』には、賽関索という渾名を持つ王雄という男が出ている。『水滸』の病関索楊雄である。関索といえば、宋代の講釈では英雄として通っていたのだ。『平話』は口演台本に過ぎないものだったから、関索という名が唐突に出てきても、講釈師はそこで一席関索のエピソードを語ることができたのだ。ところが、『演義』がまとめられた元末明初頃には、その名のみ残って、口演できる講釈師がいなくなってしまっていたということも考えられる。すると、『演義』作者が、関羽の第三子などと苦しい言訳を考えた理由がわかるような気がする。なお、関索については、小川環樹氏の詳しい論考「関索の伝説そのほか」（『中国小説史の研究』所収。岩波書店。昭和四十三年十一月。初出は

岩波文庫『三国志』第八冊、付録。昭和三十九年二月）がある。

(16) 周倉は『志』には出ていない人物である。『演義』では黄巾賊の残党から関羽の部下となり、最後までその片腕となって活躍する英雄である。『平話』にも同じ名が出るが、関羽とは全く関係がなく、関羽の死後、孔明に従って祇山に出陣する部将の一人としてである。その周倉が、どうして関羽と結びつくことになるのか、これも疑問である。

（慶応義塾大学教授・一橋大学講師）